

8月予報（全13枚）

病防第60号  
平成20年8月1日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）  
平成20年度発生予察情報第5号を下記のとおり発表したので送付します。

平成20年度発生予報第5号（8月予報）

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成20年7月25日福岡管区気象台発表（単位：％）

要素	予報対象地域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	九州北部全域（含、山口県）	10	30	60
降水量	九州北部全域（含、山口県）	40	30	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40

2 発生予報の概要

作物	病虫害名	発生量		作物	病虫害名	発生量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
早植 水稲	穂いもち	やや少	並	大豆	ハズエンヨウ	並	並
	紋枯病	やや多	並	茶	炭疽病	並	やや少
	トビイロウンカ	やや少	やや少		チャノカクエンハチ	並	やや少
	コブノメイガ	並	並		チャハマキ	並	並
	カメムシ類	並	やや少		チャノホソガ	やや少	やや少
普通期 水稲	葉いもち	やや少	やや少		チャノヤブアザミ	並	並
	紋枯病	やや多	並		チャノミドリキヨコバエ	並	並
	トビイロウンカ	並	やや少		カザリハダニ	やや少	並
	セジロウンカ	やや少	やや少	かんきつ	かいよう病	やや少	やや少
	コブノメイガ	やや少	少		黒点病	やや少	やや少

作 物	病 害 虫 名	発 生 量		作 物	病 害 虫 名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
かんきつ	ミカンハダニ	やや多	多	イチゴ (育苗床)	炭疽病	やや少	やや少
	チャノドアザミウマ	並	やや少		うどんこ病	やや多	やや多
	カガラムシ類	並	並		ハダニ類	やや少	少
ナ シ	うどんこ病	やや少	並	夏秋 キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病等)	やや少	やや少
	ハダニ類	並	並		コナガ	やや少	やや少
カ キ	炭疽病	やや少	やや少	夏秋 果菜類	コナガ	並	並
果樹全般	カメムシ類	並	やや多		アザミウマ類	並	並
夏秋トマト・ミニトマト (高冷地)	葉かび病	やや少	並	野菜全般	ハスモンヨトウ	並	並
夏秋ナス (平坦地)	すすかび病	やや少	やや少		オオタバコガ	並	並
夏秋キュウリ (高冷地)	べと病	やや多	やや多				
	褐斑病	やや少	並				

### 3 予想発生量、発生時期、根拠、対策等

水稻（早植）

#### 1) 穂いもち

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、穂いもち（早期・早植）の発病株率9.2%（平年12.6%）、発病度2.3（平年3.5）と平年よりやや少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の穂いもちの発生は概ね平年並である。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 穂いもちは発病後の防除効果が劣るため、防除適期に防除を行う。粒剤では、出穂前の所定の使用時期に遅れないように散布する。粉剤、水和剤等では、穂ばらみ期から穂揃い期にかけて防除を行う。

#### 2) 紋枯病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率7.8%（平年3.7%）と平年よりやや多い発生であった。

イ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

- (3) 対策 ア 穂ばらみ期の発病株率が要防除水準(発病株率 20%)に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。

### 3) トビイロウンカ

- (1) 発生量: やや少  
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.0 頭/株(平年 0.1 頭)と平年並の発生であった。  
イ 生産環境研究所(合志市)における予察灯調査では、7月は平年より少ない誘殺数であった。  
(3) 対策 ア 8月上旬に「100 頭以上/100 株」確認された場合には、幼虫発生初期に防除を行う。  
イ 水稻の株元に生息しているので、粉剤及び液剤で防除する場合は株元に付着するように散布する。

### 4) コブノメイガ

- (1) 発生量: 並  
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、株当たり巻葉数 0.9(平年 0.3)と平年よりやや多い発生であった。  
イ 病害虫防除員の報告では、7月の発生は平年比やや多~少と地域間差があった。早期水稻の一部で発生が平年よりやや多かった。  
ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

### 5) カメムシ類

- (1) 発生量: 並  
(2) 根拠 ア 早植水稻周辺の雑草地等における6月の調査では、平年より少なかった。  
イ 生産環境研究所(合志市)における予察灯の調査では、アカスジカスミカメは平年よりやや多い誘殺数であった。  
ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並であった。  
エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。  
(3) 対策 ア 水稻出穂後における周辺雑草の除草は、本田への飛来を助長するために行わない。  
イ 周辺より出穂が早い場合は、飛来が多くなりやすいので注意する。

### 水稻(普通期)

#### 1) 葉いもち

- (1) 発生量: やや少  
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率 0.2%(平年 0.7%)、発病度 0.1(平年 0.2)と平年並の発生であった。  
イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並~少であった。  
ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年より少ない予想である。  
(3) 対策 ア 葉いもちが発生し、上位葉への進展が見られる場合は薬剤を散布する。

#### 2) 紋枯病

- (1) 発生量: やや多  
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生は認められなかった(発病株率平年 0.1%、発病度平年 0.0)。  
イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並~少であった。  
ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想であるため、発生の好適条件になることが予想される。  
エ 近年、8月の気温が平年より高く推移した場合、7月は少発生であっても多発する傾向がある。  
(3) 対策 ア 粒剤の防除適期は、出穂 30~10 日前頃であるが、薬剤の種類によって防除適期が異なるため注意する。

イ 穂ばらみ期の発病株率が要防除水準（発病株率 20 %）に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。

### 3) トビイロウンカ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生は認められなかった(平年 0.0 頭 / 株)。

イ 生産環境研究所(合志市)における予察灯調査では、7月は平年より少ない誘殺数であった。

(3) 対策 ア 8月上旬に「20 頭以上 / 100 株」、または8月中旬～下旬に「100 頭以上 / 100 株」確認された場合は、幼虫発生初期に防除を行う。

### 4) セジロウンカ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、1.3 頭 / 株(平年 1.3 頭)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)と天草農業研究所(天草市)における予察灯調査では、平年より少ない誘殺数であった。

### 5) コブノメイガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月に行った特別調査では、発生ほ場率は 49.4 % (平年 52.5 %) と平年並であったが、被害株率は 2.9 % (平年 13.9 %)、被害度は 1.5 (平年 8.5) と平年より低かった。

イ 病害虫防除員の報告では、地域間差があるが、7月の発生は概ね平年よりやや少ない。

ウ 気象予報によると、8月の降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 生産環境研究所(合志市)のネットトラップの捕獲状況から、本年は7月1半旬に飛来があったと思われる。7月1～10日を起算日とした有効積算温度による熊本市での次世代発蛾最盛期は7月30～8月7日(7月24日現在、アメダスデータ)と予想される。

イ 発生が多いほ場では、発蛾最盛期(粒剤)または発蛾最盛期の1週間後(粉剤及び液剤)に防除を行う。

ウ 薬剤散布にあたっては使用基準を遵守し、周辺環境等へ飛散の無いよう十分注意する。

エ 詳細は7月29日付け技術情報第8号を参照すること。

## 大豆

### 1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、播種が遅れている地域が多く、発生は認められなかった(平年：0.1 頭 / 10 株)。

イ フェロモントラップ調査において、生産環境研究所(合志市)、い業研究所(八代市)及び高原農業研究所(阿蘇市)では平年並の発生であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生はまだ認められていない。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 薬剤による防除は、老齢幼虫に対し効果が得られないため、白変葉を発見したら幼虫が分散する前に防除を行う。

## 茶

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、病葉数が 5.3 葉 / m<sup>2</sup> (平年 18.0 葉 / m<sup>2</sup>) と平年より少ない発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～少であった。  
ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 常発地では摘採残葉の発病状況等に注意するとともに、秋芽萌芽期に防除を行う。

## 2) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は0.9枚/㎡(平年0.7枚/㎡)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、7月の誘殺数は平年より少なかった。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、7月の誘殺数は平年並であった。

エ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

オ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア ほ場の見回りやフェロモントラップで発蛾最盛期を把握して、その7～10日後の若齢幼虫期を対象に防除を行う。特に、三番茶摘採後が防除適期となる。

## 3) チャハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は0.3枚/㎡(平年0.1枚/㎡)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、7月の誘殺数は平年より多かった。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、7月の誘殺数は平年よりやや少なかった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア ほ場の見回りやフェロモントラップで発蛾最盛期を把握して、その7～10日後の若齢幼虫期を対象に防除を行う。特に、三番茶摘採後が防除適期となる。

## 4) チャノホソガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉数は0.8枚/㎡(平年5.0枚/㎡)と平年より少ない発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、7月の誘殺数は平年より多かった。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、7月の誘殺数は平年より少なかった。

エ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや少～少であった。

オ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 産卵は新葉にのみ行われるので、三角葉巻を作る前の若齢幼虫を対象として秋芽萌芽期に防除を行う。

## 5) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は2.6%(平年2.6%)と平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)の黄色粘着トラップにおける、7月の誘殺数は平年並であった。

ウ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、7月は平年より少ない発

生であった。

エ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

オ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3)対策 ア 新葉のみを加害するので、秋芽萌芽期に防除を行う。

#### 6) チャノミドリヒメヨコバイ

(1)発生量：並

(2)根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は12.4%(平年3.3%)と平年より高かった。

イ 茶業研究所(御船町)のたたき落とし調査では、平年よりやや少ない発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3)対策 ア 新葉のみを加害するので、秋芽萌芽期に防除を行う。

#### 7) カンザワハダニ

(1)発生量：やや少

(2)根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率は1.8%(平年0.8%)と平年並の発生であった。

イ 茶業研究所(御船町)の寄生葉率調査では、7月は平年並の発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや少～少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3)対策 ア 通常、8月下旬ごろから発生が多くなるため、茶園をよく観察し、発生を認めたら防除を行う。発生が多くなってからでは、どの薬剤も効果が得られないため、発生初期の防除に心がける。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### カンキツ

#### 1) かいよう病

(1)発生量：やや少

(2)根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率0.3%(平年3.9%)、発病果率0.6%(平年7.0%)で、平年比少の発生であった。

イ 果樹研究所(宇城市)の調査(無防除樹甘夏)では、7月6半旬の春葉の発病率が2.8%(平年5.9%)、果実の発病率が14.0%(平年29.4%)で平年比やや少の発生であった。

ウ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～少であった。

エ 気象予報によると、8月の降水量は平年より少ない予想である。

(3)対策 ア 夏秋梢ではミカンハモグリガ食害痕に発病しやすいので、防除を徹底する。

イ 発病した葉・枝・果実は伝染源となるので、剪除する。

ウ 強風雨は、致傷及び水媒により感染を助長するため、防風ネット等の対策を講じる。

#### 2) 黒点病

(1)発生量：やや少

(2)根拠 ア 7月の巡回調査では、発病果率0.2%(平年3.1%)で、平年比少の発生であった。

イ 果樹研究所の調査(無防除樹興津早生)では、7月6半旬の果実の発病率は94.0%(平年82.2%)で平年よりやや高く、発病度は15.7(平年30.1)

で平年より低かった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～少であった。

エ 気象予報によると、8月の降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 枯枝は伝染源となるため、剪除する。剪定くず等も、園外に持ち出して処分する。

イ 定期的に園を見回り降水量 200 ～ 250 mm または前回散布から 25 ～ 30 日を目安に防除を行う。

### 3) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 27.5 % (平年 11.7 %) と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準は、メス成虫寄生葉率 30 ～ 40 %、10 葉当り 5 ～ 10 頭である。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 4) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害果を認めなかった (平年被害果率 1.0 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比多～少で、地域によって差があった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 発生程度の調査は、展着剤あるいは洗剤を 5,000 ～ 10,000 倍に薄めてコップに入れ、その中で果実 (100 果) を洗う。洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペ等で虫を数える。15 頭以上を確認した場合直ちに防除する。

### 5) カイガラムシ類 (アカマルカイガラムシ・ナシマルカイガラムシ)

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～やや少であった。

イ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 農薬の効果が高い幼虫発生初期に防除する。アカマルカイガラムシの第二世代幼虫は 7 月下旬～ 8 月上旬、ナシマルカイガラムシの第二世代幼虫は 7 月下旬～ 8 月中旬に発生する。

### ナシ

#### 1) うどんこ病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病を認めなかった (平年発病葉率 0.0 %)。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 収穫期から収穫後に発生し早期落葉により樹勢が低下するので、発生初期に薬剤を散布する。

## 2) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 7.0 % ( 平年 5.3 % ) と平年並の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 要防除水準は、メス成虫の寄生葉率 20 % 以上、1 葉当り 1 ～ 2 頭である。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## カキ

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、果実の発病を認めなかった ( 平年発病果率 0.0 % )。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 徒長枝への感染が多いと果実への感染が多くなるため、感染枝はすぐに剪除する。

## 果樹全般 (カキ、ナシ、カンキツ類等)

### 1) カメムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 生産環境研究所 ( 合志市 )、および天草農業研究所 ( 天草市 ) における予察灯とフェロモントラップの7月の誘殺数は、チャバネアオカメムシが平年並～やや少、ツヤアオカメムシが平年比やや多～並であった。

イ ヒノキ球果一果当りの平均口針鞘数は、合志市 0.8 ( 7 月 3 日調査 )、大津町 0.1 ( 7 月 3 日調査 )、宇城市 1.9 ( 7 月 17 日調査 ) で、果樹園への飛来が目安となる 25 より少ない。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

(3) 対策 ア 発生量には地域差が大きく、局地的に多発する可能性があるため、ほ場をよく見回り成虫の発生に注意し、初期防除を徹底する。

## 3 予報概要、根拠、対策等

### 野菜病害

#### 夏秋トマト、ミニトマト ( 高冷地 )

### 1) 葉かび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった ( 平年の発病葉率 13.5 % )。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

(3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。

イ 換気を良くし、過湿防止に努める。

ウ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外で処分する。

エ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。



## 夏秋ナス（平坦地）

### 1) すずかび病

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、5ほ場中1ほ場で発病株率が76.0%であったものの、それ以外のは場では発病を認めなかった（平年の発病株率2.0%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

（3）対策 ア 過湿条件で多発するので、排水や灌水量に注意する。

イ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外に処分する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 夏秋キュウリ（高冷地）

### 1) ペト病

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発病葉率46.7%（平年27.4%）と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

（3）対策 ア 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外で処分する。

イ 肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

ウ ほ場の排水を良くし過湿防止に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 2) 褐斑病

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病葉率8.1%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～やや少と、地域により差があった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

（3）対策 ア 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き園外に処分する。

イ 窒素質肥料の多用を避け過繁茂にならないようにする

ウ 多発後の防除は困難なので、発病初期の防除に努める。

## イチゴ（育苗床）

### 1) 炭疽病

（1）発生量：やや少

（2）根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった（平年の発病株率2.2%）。

イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。

（3）対策 **ア 育苗床（寒冷紗は雨よけにならない）の雨よけを徹底し、雨滴による病原菌の拡散を防止する。**

イ 全面マルチや高設育苗を行い、灌水や降雨時の泥水の跳ね返りを防止する。

ウ 育苗ポットの間隔は広めに取り、不要な下葉などは除去し通風採光を良くする。

- エ 株元から灌水する。( 頭上散水の禁止、天候に合わせた適量灌水 )。灌水は、夕方には培土表面が乾くように午前中心に行う。
- オ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
- カ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。
- キ 降雨後の摘葉は感染を助長するため、行わない。
- ク 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 2) うどんこ病

- ( 1 ) 発生量：やや多
- ( 2 ) 根拠
  - ア 7月の巡回調査では、発病株率 5.7 % ( 平年 2.4 % ) と平年比やや多の発生であった。
  - イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年比多～並であった。
  - ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。
- ( 3 ) 対策
  - ア 今後、菌そうが消失して目立たなくなるが、盛夏でも病原菌は潜在感染しており、秋になると再び発病する可能性がある。
  - イ 伝染源となる発病葉や不要な下葉などは早めに取り除き、園外で処分する。
  - ウ ほ場の排水を良くし、多湿を避ける。
  - エ 多発すると防除が困難なため初期防除を徹底し、薬剤散布は葉裏に十分かかるようにする。
  - オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 夏秋キャベツ ( 高冷地 )

### 1) 細菌性病害 ( 黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病 )

- ( 1 ) 発生量：やや少
- ( 2 ) 根拠
  - ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった ( 平年の発病株率 黒腐病5.8%、軟腐病0.3%、黒斑細菌病0.0% )。
  - イ 病害虫防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。
  - ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高く、降水量は平年より少ない予想である。
- ( 3 ) 対策
  - ア ほ場の排水を良くする。
  - イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。
  - ウ 発病後の防除は困難であり台風や大雨の後に多発するので、予防散布および風雨後に薬剤を散布する。

## 野菜虫害

### 夏秋果菜類

### 1) コナジラミ類

- ( 1 ) 発生量：並
- ( 2 ) 根拠
  - ア 7月の巡回調査では、オンシツコナジラミが平坦地のナスで寄生葉率 6.4 % ( 平年 17.0 % ) と平年比やや少の発生、高冷地のキュウリで寄生葉率 13.3 % ( 平年 14.5 % ) と平年並の発生であった。
  - イ 7月の巡回調査では、高冷地のトマトで寄生葉率が 40.0 % ( 平年 13.8 % ) と平年比多であったが、その内訳はオンシツコナジラミのみ発生している地域では平年並、オンシツコナジラミとタバココナジラミが混発している地域では発生量が多かった。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年比やや多～並であった。  
ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 施設開口部に防虫ネットを設置し、コナジラミ類のハウス内への侵入とハウス外への分散を防ぐ。

イ 施設内の雑草は重要な増殖源となるので、除草する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 寄生密度が高くなると防除が困難となるため、早期防除に努める。

オ 薬剤散布は、使用量に注意し、薬液が下位葉や葉裏など植物全体に十分かかるように丁寧に散布する。

カ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

キ **タバココナジラミバイオタイプQは有効な薬剤が少ないので、薬剤の選定に注意する。**

## 2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生葉率 9.2 % (平年 1.2 %) と平年比やや多の発生であったが、多発ほ場は5ほ場中1ほ場と限られていた。高冷地のキュウリでは発生を認めなかった(平年の寄生葉率 2.1 %)。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年比多～やや少と、地域により差があった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色の粘着トラップを設置し、早期発見に努める。

イ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除草する。

ウ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## イチゴ(育苗床)

### 1) ハダニ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査(育苗床)では、寄生株率 2.0 % (平年 4.6 %) で平年比やや少の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に下位葉を重点に防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 夏秋キャベツ(高冷地)

### 1) コナガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の寄生株率 17.9 %)。

イ 病虫害防除員からの報告では、7月の発生は平年並～やや少であった。

ウ フェロモントラップによる7月の誘殺数は、阿蘇市波野と山都町鶴底で平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早期発見、早期防除に努める。

- イ 幼虫は葉裏に寄生しているので、薬剤は葉裏まで十分かかるように丁寧に散布する。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## 野菜全般

### 1) ハスモンヨトウ

#### (1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生を認めなかった(平年の寄生株率イチゴ 0.0 %、トマト 0.1 %、ナス 0.3 %、キャベツ 1.3 %)

イ フェロモントラップによる 7 月の誘殺数は、生産環境研究所(合志市) 高原農業研究所(阿蘇市) い業研究所(八代市) 山都町鶴底で平年並、阿蘇市波野で平年比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平年比やや多～少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

- (3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することがあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

オ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページ(<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>)を参照。

### 2) オオタバコガ

#### (1) 発生量：並

- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、平坦地のナスでは寄生株率 0.4 % (平年 0.1 %) は平年並、高冷地のトマトでは発生は認めなかった(平年の寄生株率 0.1 %)

イ フェロモントラップによる 7 月の誘殺数は、生産環境研究所(合志市) 高原農業研究所(阿蘇市) 山都町鶴底では平年並、い業研究所(八代市) では平年比やや少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、7 月の発生は平年比やや多～少であった。

エ 気象予報によると、8月の気温は平年より高い予想である。

- (3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、ほ場をよく見回り、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

エ 最新のフェロモントラップデータは、病害虫防除所のホームページ(<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>)を参照。

## トマト・ウリ類の育苗期の防除対策

近年問題となっているトマト黄化葉巻病、ウリ類黄化えそ病、ウリ類退緑黄化病は、育苗期に感染すると被害が大きくなります。発病を防止するためには、以下の防除対策を徹底することが重要です。

< 育苗期から生育初期の防除対策 >

### 播種・定植前の管理：

施設周辺及び内部の雑草や野良生えトマト、メロン等は、ウイルスの伝染源、タバココナジラミやスリップス類の生息・増殖場所となるので、必ず播種や定植の10日以上前までに除去するとともに、育苗期から栽培期間中も定期的に除草する。

### 施設内へのタバココナジラミ・スリップス類の侵入防止：

育苗時に感染すると感染株は収穫皆無になる恐れがあるため、育苗施設やハウス等の開口部（天井、サイド、換気部など）には防虫ネットを必ず設置し、タバココナジラミやスリップス類の侵入を抑制する。なお、目合いが小さいほど侵入阻止効果は高い。しかし、ハウス内の温度が高くなるため循環扇や遮光ネット等の対策を行う。

また、育苗ハウスは近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを150 cm幅で設置し、侵入抑制を図る。

黄色または青色粘着トラップを施設内に設置し、コナジラミ類やスリップス類の早期発見に努める。

### 感染源の除去：

発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し埋没処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。

### 薬剤防除：

防虫ネットのみでは、タバココナジラミやスリップス類の侵入を完全には防げないため、薬剤防除をあわせて徹底する。また、育苗期後半、または定植時には粒剤を処理する。

（注意：農薬使用にあたっては、使用方法、使用時期、総使用回数等を厳守する。）

## 農薬安全使用上の留意点

薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、薬剤が周辺作物へ飛散しないよう飛散防止対策を徹底しましょう。

詳しい内容等については

生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。